口上

永富

岩田様

聖典

附・和英佛教讃歌集

満座那佛教會

目　次

十二禮 ____ 58
正信偈 ____ 54
三歸依文 ____ 40
誓ひの言葉 ____ 39
恩德讃 ____ 38
宗　歌 ____ 37
法の御山 ____ 36
なだめ ____ 35
み佛に抱かれて ____ 34
佛教青年会々歌 ____ 33
佛青行進曲 ____ 32
佛教婦人 ____ 31
夕の歌 ____ 30
朝の歌 ____ 30
佛の子供 ____ 29
佛の御手 ____ 29
坊やはよい子 ____ 28
ののさま ____ 28
佛のみ光 ____ 27
御親の聲 ____ 27
幸ある我 ____ 26
月が出た ____ 25
佛さまとは ____ 25
兒守歌 ____ 24
聖　夜 ____ 24
眞実の佛 ____ 23
生らば念佛 ____ 23
光 ____ 22
紅百合 ____ 21
清きまどゐ ____ 20
佛さま ____ 19
まねきの御手 ____ 19
佛教徒の歌 ____ 18
白　道 ____ 17
合掌歌 ____ 17
英語目次 ____ 1 - 15

十二禮

稽首天人所恭敬
阿彌陀仙兩足尊
在彼微妙安樂國
無量佛子衆圍繞
金色身淨如山王
奢摩他行如象歩

兩目淨若青蓮華
故我頂禮彌陀尊
面善圓淨如滿月
威光猶如千日月
聲如天鼓倶翅羅
故我頂禮彌陀尊

觀音頂戴冠中住
種種妙相寶莊嚴
能伏外道魔憍慢
故我頂禮彌陀尊
無比無垢廣清淨
衆德皎潔如虛空
所作利益得自在

故我頂禮彌陀尊
十方名聞菩薩衆
無量諸魔常讃嘆
爲諸衆生願力住
故我頂禮彌陀尊
金底寶間池生華
善根所成妙臺座

於彼座上如山王
故我頂禮彌陀尊
十方所來諸佛子
顯現神通至安樂
瞻仰尊顏常恭敬
故我頂禮彌陀尊
諸有無常無我等

亦如水月電影露
爲衆說法無名字
故我頂禮彌陀尊
彼尊佛刹無惡名
亦無女人惡道怖
衆人至心敬彼尊
故我頂禮彌陀尊

彼(ヒ)尊(ソン)无(ム)量(ショウ)方(ホウ)便(ベン)境(キョウ)
無(ム)有(ウ)諸(ショ)趣(シュ)悪(アク)知(チ)識(シキ)
往(オウ)生(ジョウ)不(フ)退(タイ)至(シ)菩(ボ)提(ダイ)
故(コ)我(ガ)頂(チョウ)禮(ライ)彌(ミ)陀(ダ)尊(ソン)

我(ガ)説(セツ)彼(ヒ)尊(ソン)功(ク)德(ドク)事(ジ)
衆(シュ)善(ゼン)無(ム)邊(ヘン)如(ニョ)海(カイ)水(スイ)
所(ショ)獲(ギャク)善(ゼン)根(ゴン)清(ショウ)淨(ジョウ)者(シャ)
迴(エ)施(セ)衆(シュ)生(ジョウ)生(ショウ)彼(ヒ)國(コク)

正信偈

歸命无量壽如來
南无不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所
覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡

建立无上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放无量无邊光
无㝵无對光炎王

清淨歡喜智慧光
不斷難思无稱光
超日月光照塵剎
一切群生蒙光照
本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃

必至滅度願成就
如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海
應信如來如實言
能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃

凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味
攝取心光常照護
已能雖破无明闇
貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧

雲霧之下明无闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣
一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難无過斯
印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意

明如來本誓應機
釋迦如來楞伽山
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有无見
宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂

顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂
憶念彌陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩
天親菩薩造論說

歸命无㝵光如來
依修多羅顯眞實
光闡橫超大誓願
廣由本願力迴向
爲度群生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆数

得至蓮華藏世界
即證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死薗示應化
本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教

梵燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果顯誓願
往還廻向由他力
正定之因唯信心
惑染凡夫信心發
證知生死即涅槃

必至无量光明土（ヒッシムリャウクワウミャウド）
諸有衆生皆普化（ショウシュジャウカイフケ）
道綽決聖道難證（ダウシャクケツシャウダウナンショウ）
唯明淨土可通入（ユイミャウジャウドカツウニフ）
萬善自力貶勤修（マンゼンジリキヘンゴンシュ）
圓滿德號勸專稱（ヱンマントクガウクワンセンシャウ）
三不三信誨慇懃（サンプサンシンケオンゴン）

像末法滅同悲引（ゾウマツホウメツドウヒイン）
一生造惡値弘誓（イッシャウザウアクチグゼイ）
至安養界證妙果（シアンヤウガイショウメウクワ）
善導獨明佛正意（ゼンダウドクミャウブッシャウイ）
矜哀定散與逆惡（コウアイジャウサンヨギャクアク）
光明名號顯因緣（クワウミャウミャウガウケンインネン）
開入本願大智海（カイニュホングワンダイチカイ）

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
與韋提等獲三忍
即證法性之常樂
源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深

報化二土正辨立
極重悪人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲无倦常照我
本師源空明佛教
憐愍善悪凡夫人

眞(シン)宗(シウ)教(ケウ)證(ショウ)興(コウ)片(ヘン)州(シウ)
選(セン)擇(ジャク)本(ホン)願(グヮン)弘(グ)悪(アク)世(セ)
還(ゲン)來(ライ)生(シャウ)死(ジ)輪(リン)轉(デン)家(ゲ)
決(ケッ)以(チ)疑(ギ)情(ジャウ)爲(ヰ)所(ショ)止(シ)
速(ソク)入(ニフ)寂(ジャク)靜(ジャウ)无(ム)爲(ヰ)樂(ラク)
必(ヒッ)以(チ)信(シン)心(ジン)爲(ヰ)能(ノウ)入(ニフ)
弘(グ)經(キャウ)大(ダイ)士(ジ)宗(シウ)師(シ)等(トウ)

拯(ジョウ)濟(サイ)无(ム)邊(ヘン)極(ゴク)濁(ジョク)悪(アク)
道(ダウ)俗(ゾク)時(ジ)衆(シュ)共(グ)同(ドウ)心(シン)
唯(ユイ)可(カ)信(シン)斯(シ)高(カウ)僧(ソウ)說(セ)

初重

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南
彌陀成佛(ミダジャウブツ)ノコノカタハ
イマニ十劫(ジフカフ)ヲヘタマヘリ
法身(ホフシン)ノ光輪(クワウリン)キハモナク

世(セ)ノ盲冥(マウミャウ)ヲテラスナリ
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南
智慧(チヱ)ノ光明(クワウミャウ)ハカリナシ

有(ウ)量(リヤウ)ノ諸(シヨ)相(サウ)コトヾク
ヨロツノシユシヤウナリ
光(クワウ)暁(ケウ)カフラヌモノハナシ
眞(シン)實(ジチ)明(ミヤウ)ニ歸(クヰ)命(ミヤウ)セヨ
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无

二重
阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛
南无阿弥陀佛

南

解脱（ゲダチ）ノ光輪（クワウリン）キハモナシ

光觸（クワウソク）カフルモノハミナ

有无（ウム）ヲハナルトノベタマフ

平等覺（ビヤウドウカク）ニ歸命（クヰミヤウ）セヨ

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南

光雲无㝵如虚空（クワウウンムゲニヨコク）（ヒカリクモノコトクシテサハリナキコトコクノコトシ）・

一切（ヰチサイ）ノ有㝵（ウゲ）ニサハリナシ

光澤（クワウタク）カフラヌモノゾナキ

難思議（ナンジギ）ヲ歸命（クヰミヤウ）セヨ

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

（三重）南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南

清淨（シャウジャウ）光明（クワウミャウ）ナラビナシ

遇斯光（グシクワウ）ノユヘナレバ

一切（イチサイ）ノ業繋（ゴフケ）モノゾコリヌ

畢竟依ヲ歸命セヨ

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南无阿弥陀佛

南

佛光照曜最第一

光炎王佛トナヅケタリ

三塗ノ黒闇ヒラクナリ

大應供ヲ歸命セヨ

願以此功德

平等施一切

同發菩提心

往生安樂國

三歸依文

○人身受け難し今已に受く佛法聞き難し今已に聞く此身今生に向って度せずんば更に何れの生に向ってか此身を度せん大衆諸共に、至心に三寶に歸依し奉るべし。

自ら佛に歸依し奉る當に願はくば衆生と共に大道を體解して無上意を發さん。

自ら法に歸依し奉る當に願はくば衆生と共に深く經藏に入りて智慧海の如くならん。

自ら僧に歸依し奉る當に願はくば衆生と共に大衆を統理して一切無礙ならん。

○無上甚深微妙の法は、百千萬劫にも相遇ふこと難し、我今見聞し受持することを得たり願はくば如來の眞實を解し奉らん。

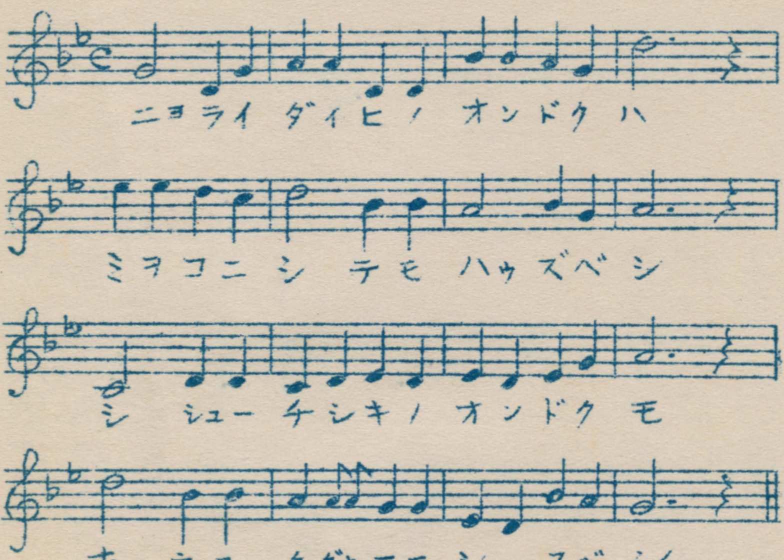
誓ひの言葉

み佛様(ホトケサマ)は私共(ワタクシドモ)の親様(オヤサマ)であります。

み佛様(ホトケサマ)はいつも私共(ワタクシドモ)を護(マモッ)てゐて下(クダ)さいます。

私共(ワタクシドモ)はみ佛様(ホトケサマ)の教(オシ)へを聞(キ)いてよき人(ヒト)となりませう。

恩徳讃



恩(オン)徳(トク)讃(サン)

如來(ニョライ)大悲(ダイヒ)の恩徳(オンドク)は
身(ミ)を粉(コ)にしても報(ホウ)ずべし
師主(シュ)知識(チシキ)の恩徳(オンドク)も
骨(ホネ)を砕(クダ)きても謝(シャ)すべし

宗歌

ふかぎみ法(ノリ)にあひまつる
身(ミ)の幸(サチ)なにたとふべき
ひたすら道(ミチ)をききひらき
まことのみむねいただかん

永久(トハ)のやみよりすくはれし
身(ミ)の幸(サチ)なににくらぶべき
六字(ジ)のみなをとなへつつ
よのなりはひにいそしまん

海(ウミ)の内外(ウチト)のへだてなく
みおやの徳(トク)のたふとさを
わがはらからにつたへつつ
みくにの旅(タビ)を共(トモ)にせん

法の御山

法(ノリ)のみ山(ヤマ)のさくら花(ハナ)
昔(ムカシ)のままに匂(ニホ)ふなり
道(ミチ)の枝折(シヲリ)の跡(アト)とめて
さとりの高嶺(タカネ)の春(ハル)を見(ミ)よ

法(ノリ)のみ山(ヤマ)のほととぎす
昔(ムカシ)のままに名(ナ)のるなり
浮世(ウキヨ)は夢(ユメ)ぞ短(ミジ)か夜(ヨ)と
驚(オドロ)きさます聲(コヱ)をきけ

慰藉（なぐさめ）

一
浮世（ウキヨ）の縁（エニシ）限（カギ）り来（き）て
別（ワカ）れて逝（ユ）きし法（ハウ）の友（トモ）
佛（ホトケ）の御前（ミマヘ）に幸（サチ）あらむ
涙（ナミダ）の中（ウチ）に慰藉あり

二
歎（なげ）き悲（カナ）しむ世（ヨ）に別（ワカ）れ
楽（タノ）しき國（クニ）に生（ア）れまして
奇（ク）しき佛（ホトケ）となりぬらむ
歎（なげ）きの中（ウチ）に慰藉（ナグサメ）あり

三
手足（テアシ）の動（ウゴ）き絶（タエ）ぬれど
此身（コノミ）を捨（ス）てて限（カギ）りなき
力（チカラ）ある身（ミ）となりぬらむ
涙（ナミダ）の中（ウチ）に慰藉（ナグサメ）あり

四
肉（ニク）の眼（マナコ）は閉（ト）づるとも
妙（タヘ）なる法の眼（マナコ）もて
我等（ワレラ）が聚（マドヰ）を見（ミ）るあらむ
歎（なげ）きの中（ウチ）に慰藉（ナグサメ）あり

み佛に抱かれて

一

みほとけに　抱（イダ）かれて
君（キミ）ゆきぬ　西（ニシ）の岸（キシ）
なつかしき　おもかげも
きえはてし　かなしさよ

二

みほとけに　抱（イダ）かれて
君（キミ）ゆきぬ　慈悲（ジヒ）の國（クニ）
みすくひを　身（ミ）にかけて
示（シメ）します　かしこさよ

三

みほとけに　抱（イダ）かれて
君（キミ）ゆきぬ　花（ハナ）の里（サト）
つきせざる　たのしみに
笑（ヱ）みたまふ　うれしさよ

四

みほとけに　抱（イダ）かれて
君（キミ）ゆきぬ　宝（タマ）樓（ノ）閣（イヘ）
うつくしき　みほとけと
なりましし　たふとさよ

佛教青年會會歌

曉の鐘は高鳴り
朝日子の光かがやく
いざ吾等
共に目ざめん人の世の朝

萬象の緑もえたち
無憂華の匂ただよふ
いざ吾等
共に励まん人の世の春

天地の命は永く
金剛の力漲る
いざ吾等
共に進まん御佛の跡

佛青行進曲

一、
東方既に明け初めて
曉の鐘鳴りひびき
頻伽の鳥のとび交える
こゝ黎明の太平洋
Y・B・A・
佛青佛青佛青

二、
燦たる慈光身に得けて
金剛不壞の此の信
團結一致人の世に
建てる誠の法の道
Y・B・A・
佛青佛青佛青

三、
異る國は数あれど
不二の教えにうち集い
我等の常にかかぐるは
五色に染めし新佛旗
Y・B・A・
佛青佛青佛青

四、
今こそ空は輝きて
谷間に育つ岩魚の背に
曠野の涯の露草に
恵みの光はさしそゝぐ
Y・B・A・
佛青佛青佛青

佛教婦人

一、八百萬にも　むすばれし
人の心の　絲すぢを
一つ一つに　ときほどく
佛の教を　仰ぐべし

二、つゞれの衣　着るとても
みのり豊けき　女たち
柳櫻の　にしきをぞ
こゝろの上に　よそはなむ

三、まこと心の　大丈夫を
操正しき　をみな子を
あはれ御國の　おんために
育みたてよ　はぐくめよ

夕の歌

一、静かにくれゆくこの夕べ
　鐘が鳴る　鐘がなる

二、世のなやみをつゝみて
　鐘が鳴る　鐘がなる

三、聞けよ目醒めよ同朋よ
　鐘が鳴る　鐘がなる

四、けふの感謝と幸福の
　鐘が鳴る　鐘がなる

朝の歌

一、朝な〳〵に　佛教仰ぎ
　浄き勤めに　いそしむ我等

二、朝な〳〵に　佛行を慕い
　浄き思を　語らう我等

三、朝な〳〵に　佛證讃え
　浄き意を　やしなう我等

四、慈恩あふるゝ貴き一日
　今日も捧げん我等の生命

佛の子供

一、われ等は佛の子供なり
うれしい時も
かなしい時も
み佛の袖にすがりなむ

二、われ等は佛の子供なり
をさなき時も
老いたる時も
み佛にかはらずつかへなむ

佛の御手

一、佛のみ手に　我等は引かれ
樂しき國に　いざや行かなん
（折り返し）
ああ御佛　ああ御佛
ああ御佛　我を愛す

二、我等の罪も　佛の御手に
まかせまつれば我が世は安し

三、いざ我が友よ手を取りあひて
佛のをしへ　共に聞かなん

坊やはよい子

一　朝早(アサハヤ)う起(オ)きて
手水(テウズ)をつかひ
み佛様(ホトケサマ)に
お禮(レイ)をします
なむあみだぶつ
なむあみだぶつ
なむあみだぶつ
私(ワタシ)はいつも
からいふて拜(オガ)む

二　み佛(ホトケ)さまは
お手々(テテ)をあげて
坊(ボウ)やはよい子
大(オホ)きくおなり
お手々(テテ)をさげて
かはいい孃(ジヤウ)や
悲(カナ)しい時(トキ)も
嬉(ウレ)しい時(トキ)も
いつしよに居(ヰル)よ
なかよくお遊(アソ)び

ののさま

のんのん　ののさま
ほとけさま
おてて　あはせて
おがみませう
のんのん　ののさま
ほとけさま
おめめ　つぶつて
おがみませう

佛のみ光

一
あれ〳〵露(ツユ)がきら〳〵と
朝日(アサヒ)をうけてひかつてる
わたしもほとけのみ光(ヒカ)りを
うけてよい子(コ)と
なりませう

二
あれ〳〵草(クサ)がそよ〳〵と
朝風(アサカゼ)うけてなびいてる
わたしもほとけのみ教(オシ)へに
從(シタガ)ひよい子と
なりませう

御親の聲

一、み親(オヤ)の聲(コエ)が高(タカ)らかに
きこえるやうな心持(ココロモチ)
嬉(ウレ)しい事(コト)が昨日(キノフ)今日(ケフ)
我等(ワレラ)のめぐりによつて來(ク)る

二、風(カゼ)のひゞきも鳥(トリ)歌(ウタ)も
流(ナガ)れの音(オト)も慕(シタ)しく
朝(アサ)はみ親(オヤ)に起(オコ)されて
夜(ヨル)はみ親(オヤ)に護(マモ)られる

三、佛(ホトケ)の心(ココロ)いたゞいて
今(イマ)は嬉(ウレ)しい夜晝(ヨルヒル)を
樂(タノ)しく暮(クラ)す私等(ワタシラ)は
御親(ミオヤ)のからだ我(ワガ)からだ

幸ある我

一

小鳥の聲に夢さめて
慈悲のみ親を拜しつつ
樂しき今日を思ふとき
幸ある我を歌ふなり

二

學びの庭にはた家に
おのがつとめをなしとげて
佛の恵思ふとき
幸ある我を歌ふなり

三

夕樂しきまとゐして
智慧と慈悲とにまもらるる
嬉しき此の身思ふとき
幸ある我を歌ふなり

四

げに幸なりや幸なりや
憂へ悲しむ人の世に
樂しき慈悲に育ちつつ
幸ある我を歌ふなり

月(ツキ)が出(デ)た

一、月(ツキ)が出(デ)た　月(ツキ)が出た
手毬(テマリ)のやうにまんまるく
み佛様(ホトケサマ)の　おこゝろは
月(ツキ)のやうに　まんまるい

二、月(ツキ)が出(デ)た　月(ツキ)が出(デ)た
鏡(カガミ)のやうに　くもらずに
み佛様(ホトケサマ)の　おこゝろは
月(ツキ)のやうに　くもらない

三、月(ツキ)が出(デ)た　月(ツキ)が出(デ)た
慈悲(ジヒ)の光(ヒカリ)に　まもられる
み佛様(ホトケサマ)の　お子供(コドモ)は
月(ツキ)のやうに　うつくしい

佛さまとは

ほとけさまとは　どんなかた
ねがいのとうり　わたしらを
おだすけなさる　おかたです

ほとけさまとは　どんなかた
なさけもちえも　かぎりなく
とうといかたが　ほとけさま

ほとけさまとは　どんなかた
われらのために　みをすてて
生かして下(クダ)さる　おかたです

ほとけさまとは　どんなかた
いのちをながく　またつよく
めぐんで下さる　ほとけさま

兒守歌

一、坊やの夢は　どこへ行た
三里山道　里の雪
ふんでほとけの　國へ行た
きんらんどんすの　國へ行た
ねんねんよい兒ぢや
ねんねしな

二、坊やは夢に　どこでねた
七里結界　浪の花
こえて後光の　國でねた
金銀珊瑚の　國でねた
ねんねんよい兒ぢや
ねんねしな

聖夜

一
星の夜空の美しさ
誰かは知るや天のなぞ
無数の瞳かゞやけば
歡喜になごむ我がこゝろ

二
ガンデス河の眞砂より
あまたおはする佛達
夜晝常に守らすと
聞くになごめる我心

眞實の佛

一、御園に匂へる花の下に
疾く來て眺めよ　妙の姿
散りては空しき　もとの梢
盛を過ぎなば悔はつきじ

二、靜けき夕の草に宿る
清けき白露　玉づゞれど
朝明け御光かゞやく時
憐や忽消えて行くよ

三、実にこそ似たれや花や露や
人の世かくてぞ亡ぶるなる
あゝ夢うつゝの境はなれ
眞実の佛の御手に　すがれ

生らば念佛

一、生らば念佛　相續し
死なば淨土に　生れなん
とてもかくても　此の身には
思ひわづらふ　事ぞなき

二、生死の苦海　ほとりなし
久しく沈める　我等をば
彌陀弘誓の　舟のみぞ
のせて必ず　渡しける

三、超世の悲願　聞きしより
我等は生死の　凡夫かは
有漏の穢身は　變らねど
心は淨土に　すみあそぶ

光

一

晴れたる夜半の空を見よ
数限りなき星かげは
きらりきらりと輝けど
大きな月は唯一つ

二

十方諸佛はましませど
私を救ひたまはるは
廣い世界に唯一人
御名も尊い阿彌陀佛

三

私の罪は深けれど
私の咎は重けれど
佛の慈悲が強いから
心にかかる事もない

四

友よ疾く來よ我が園の
青葉の蔭でみ佛の
尊い御名を稱へつつ
光仰いで遊ばうよ

紅百合

一

赤(アカ)きを誇(ホコ)る紅百合(ベニユリ)も
露(ツユ)にかわくぞ憐(アハ)れなる
流(ナガ)るゝ水(ミヅ)や走(ハシ)る雲(クモ)
暫時(シバシ)も此處(ココ)に止(トド)まらず

二

水底(ミナソコ)深(フカ)き琵琶湖(ビハコ)さへ
乾(カワ)きて盡(ツ)くる時(トキ)あるを
短(ミジカ)き人(ヒト)の世(ヨ)にありて
道(ミチ)求(モト)めざる愚(オロカ)さよ

三

たとへば上(ウヘ)に炎(ホノホ)もえ
低(ヒク)きに水(ミヅ)のつく如(ゴト)く
御惠(ミメグミ)深(フカ)き御佛(ミホトケ)は
罪(ツミ)ある我(ワレ)を救(スク)ひます

四

迷(マヨヒ)の里(サト)を今(イマ)や去(サ)り
永劫(トハ)の光(ヒカリ)と生命(イノチ)得(エ)て
佛(ホトケ)の御名(ミナ)を稱(トナ)ふれば
喜(ヨロコ)び胸(ムネ)に滿(ミ)ち充(ミ)てり

清きまとゐ

一

清(キヨ)きまとゐ　いざ友(トモ)來(コ)よ
我等(ワレラ)は皆(ミナ)　慈悲(ジヒ)の子(コ)よ
愛(イツクシ)みの花(ハナ)咲(サ)く園(ソノ)
御親(ミオヤ)はとく　待(マ)ちませり
（折返し）
救(スク)はるる　嬉(ウレ)しさよ
いざとく來(コ)よ此(コ)のまとゐ

二

怒(イカ)り憎(ニク)み　愛(アイ)し嫌(キラ)ふ
幾多(イクタ)の咎(トガ)　多(オホ)き罪(ツミ)
かくて終(ツヒ)に　沈(シヅ)む我等(ワレラ)
導(ミチビ)きます　み手(テ)たふと

三

行(ユ)く手(テ)暗(クラ)き　よみぢの旅(タビ)
絶(タ)えず守(マモ)る　父(チチ)の慈悲(ジヒ)
何(ナニ)に喩(タト)へん　この悦(ヨロコ)び
いざや讃(タタ)へん　我(ワ)が幸(サチ)を

佛さま

一、ののののさま佛さま
わたしの好きな母さまの
お胸のようにやんわりと
だかれてみたい佛さま

二、ののののさま佛さま
わたしの好きな父さまの
おててのようにしつかりと
すがつてみたい佛さま

三、ののののさま佛さま
みあかしあげておがむとき
おすがたみえてきら／＼と
後光のひかるほとけさま

まねきの御手

一

まねきの御手は前にあり
すくひの御聲耳にあり
佛の慈悲に夜はあけて
うれしの涙胸にみつ

二

よび聲きこゆ西の岸
すゝむる聲にはげまされ
ひたすらすゝむ人の世に
やはらぎあふれ光みつ

佛教徒の歌

一、一つ心に　打仰ぐ
佛の光り　吾等を照す
淨き光りの　中に立つ
此の悦びを　共に歌わん

二、一つ心に　稱えあう
佛の惠み　吾等を包む
深き惠みの　中に住む
此の悦びを　共に語らん

三、一つ心に　賴みあう
佛の力　吾等に宿る
永久の力に　護らるる
此の悦びを　共に傳へん

四、一つ心に　集い來し
吾等の國は　佛の御國
照しあいたる　まごころの
此の悦びは　とわに盡きせじ

白道

一、地をやく焔もゆるとも
水は空うちさかまくも
すくひの御聲ひとすぢに
すゝむ佛の教かな

二、いばらの道に行き惱み
迷ひもだゆる闇の世に
み光あふる本願の
ちかひ尊きすくひかな

三、きわなき慈悲のましませば
世の波風のあらきをも
ちかひの船に安らけく
ひろき心ぞうれしけれ

合掌歌

一、野ゆき山ゆき　ゆきくれて
たどきもしらず　さまよへる
あはれ旅人　いづくまで
さまよへるおのが　まなこもて
かよわきおのが　あゆみもて
かなたの岸に　いたるべき

二、久遠のちかひ　みちびきの
光のまへに　めざめるは
めぐみにすゝむ　無碍のみち
なやみのかげは　あともなく
たゞよろこびの　こゝろより
わが合掌を　さゝげまし

花祭行進曲

一、昔も昔三千年
花咲き匂ふ春八日
響きわたつた一聲に
天にも地にも我一人

二、立派な國に生れ出で
富も位もありながら
一人お城をぬけ出でて
山にこもりし十二年

三、廣い世界の眞中で
敎への門をうちひらき
渇ける人にふりまいた
甘露の水のかぎりなし

四、何年たつても變らずに
咲いたまゝなる法の花
きれいな一つを胸にさし
我等もまけずに勵みませう

花祭の歌

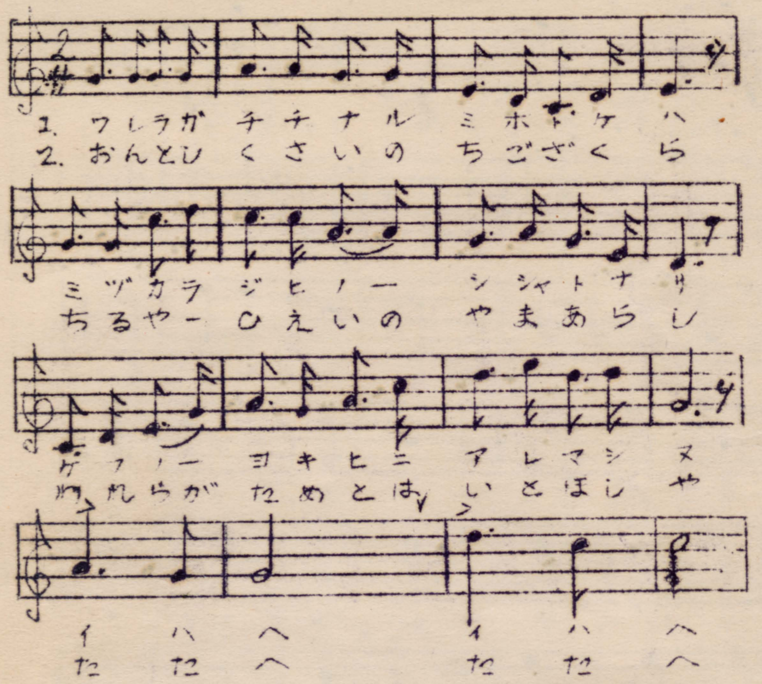
一、お庭はさくらの花のまく
草のしとねもやはらかに
今日はうれしい花まつり
佛の前でわたしらは
唱歌うたうて遊びませう

二、みなさんおいでよ暖かく
野草を渡る春かぜが
なかよく遊ぶ私等を
かはゆがられるみほとけの
心のやうにふいてくる

三、小枝に鳥がよいこえで
はるのなさけを歌つてる
いつしよにそろうて私らを
いつもいたはり下される
佛の慈悲を讃へませう

四、花で此の世がかざられる
うれしいはるをつかさどる
お方がもしもあるならば
此の世に一人なつかしい
お慈悲の高い阿弥陀さま

宗祖降誕會の歌



一
われらが父(チチ)なるみほとけは、
みづからじひのしゃとなり、
今日(ケフ)のよき日にあれまじぬ
いはへ　いはへ

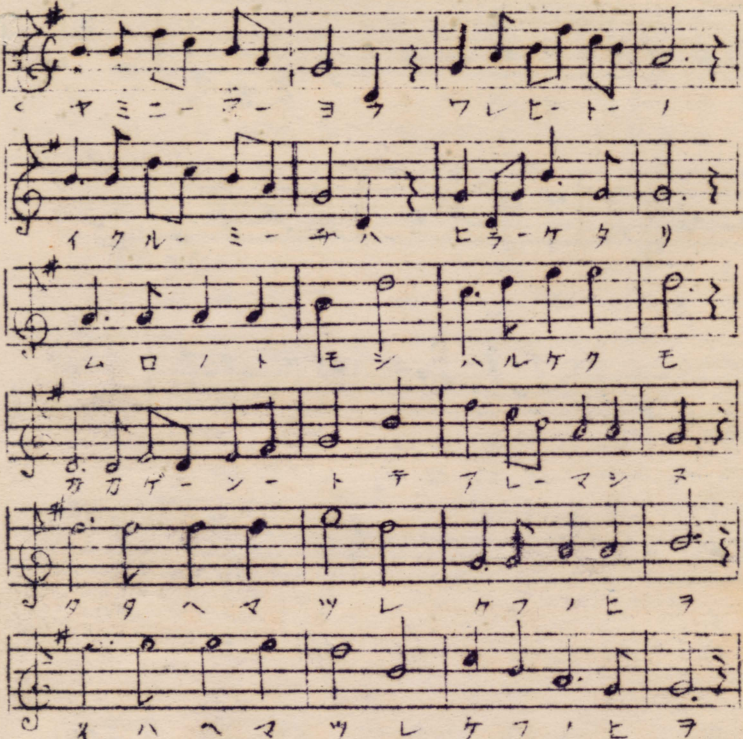
二
おん年(トシ)九さいの
ちござくら、
ちるやひえいの山(ヤマ)あらし
われらがためとはいとほしや
たたへ　たたへ

三
六かくどうのよはのゆめ、
ながれもきよきよしみづの、
み法(ノリ)はとはにさかえ行(ユ)く
うたへ　うたへ

四
われらつみある人(ヒト)の子の、
みづからちからおよばじと、
やすきをしへをひらきます
きたれ　きたれ

五
われらみおやの手(テ)によりて、
今はすくひのふねにあり、
よろこびいさみ父(チチ)のなを
たたへ　たたへ

宗祖降誕會



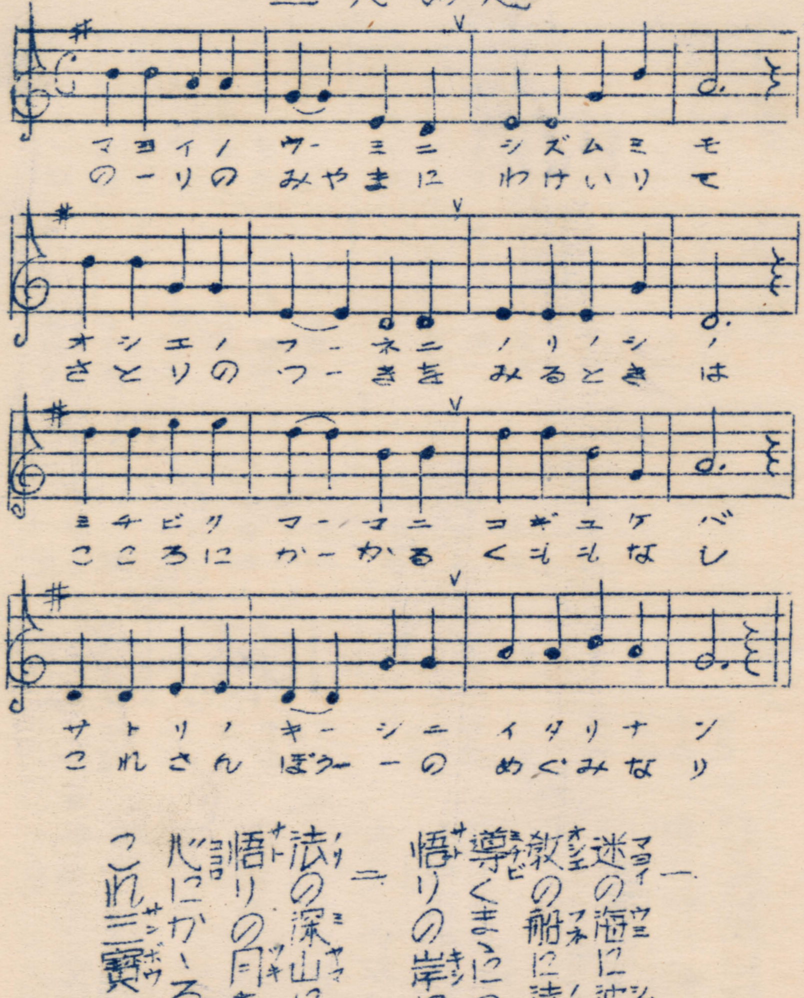
一

やみにまよふ　われひとの
いくるみちは　ひらけたり
むろのともし　はるけくも
かゞげんとて　あれましぬ
たゝへまつれ　けふの日を
いはへまつれ　けふの日を

二

かれはてにし　あめつちは
いつくしみに　うるほへり
かんろのあめ　とこしへに
そゝがんとて　あれましぬ
たゝへまつれ　けふの日を
いはへまつれ　けふの日を

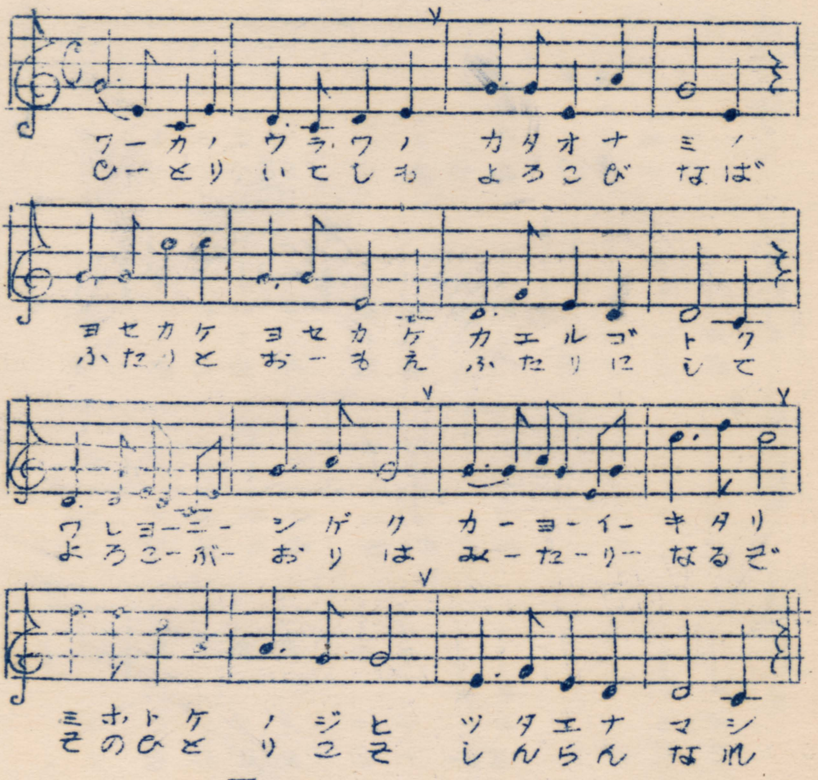
三寶の恩



一、
迷(マヨイ)の海(ウミ)に沈(シズ)む身(ミ)も
教(オシエ)の船(フネ)に法(ノリ)の師(シ)の
導(ミチビ)くまゝにこぎゆけば
悟(サト)りの岸(キシ)にいたりなん

二、
法(ノリ)の深山(ミヤマ)にわけ入(イ)りて
悟(サト)りの月(ツキ)を見(ミ)るときは
心(ココロ)にかゝる雲(クモ)もなし
これ三寶(サンボウ)の恵(メグミ)なり

報恩講の歌



三、名残(ナゴリ)のみ言(コト)　さやかにして
み名(ナ)よぶ聲(コエ)を　したいきまし
法(ノリ)のつどいの　御座(ミザ)毎(ゴト)には
み影(カゲ)をうつし　のぞみ給(タモ)う

四、もしそれ知識(チシキ)の　教(オシエ)なくば
永久(トワ)のやみじに　迷(マヨ)ひぬらん
み心(ココロ)こめし　君(キミ)によりて
今(イマ)しほとけの　慈悲(ジヒ)にあいぬ

五、よろこびたかく　むねにあふれ
うれしさ深(フカ)く　肝(キモ)に銘(メイ)ず
身(ミ)は粉(コ)に骨(ホネ)は　砕(クダ)きてしも
むくいがたなき　君(キミ)が御徳(ミトク)

千九百四十三年一月三十一日印刷
千九百四十三年二月十一日発行

編輯者　満座那佛教会
北米加州満座那十三ー十五

発行者　永富信常
北米加州満座那十四・一・四

印刷者　岩田昌規
北米加州満座那二十・十二・三

明瀬昇
北米加州満座那十六・七・三

光畑三鶴
北米加州満座那二十三・四・四

発行所　満座那佛教會

不許復製